

定説を覆す努力を

原 不二夫*

老研究者として何か書けと編集責任者から仰せつかり、標記のような題を思いついたけれど、これは私がそれを達成した上で若い人達を叱咤するといった大それたものではなく、私が永年夢に描いていたにも拘らずついぞ実現できなかつたがため末期(まつご)に及んで言い遺したくなつたものであることは、改めて申すまでもない。

最近私が読んだ本の中で最も衝撃を受けたのは、Tan Jin Quee(陳仁貴), Jomo K. S. eds., “Comet in Our Sky: Lim Chin Siong in History”, Kuala Lumpur, INSAN, 2001 という本だった。リム・チンシオン(林清祥)は、世に言う「華語派」=左派の代表として「英語派」=右派の代表・リー・クアンユウ(李光耀)とともにシンガポールの人民行動党を率い、やがてリーと袂を分つてマレーシア結成直前に逮捕され、69年に政治活動放棄声明を発表して釈放された後、いわば社会からも歴史からも葬り去られた人物である。釈放されたのは私がアジア経済研究所に入って間もない頃で、声明を訳して「動向年報」に資料として載せ、この人物は「転向者」「裏切り者」として消えていくのだらうと思った。そしてこの本を読むまで、事実そうなつたと思つていた。シンガポールで発行された正史ばかりでなく、かつてはリー首相(当時)らを「反動・傀儡」と口を極めて非難していた中国の近年の史書も、リーの先見の明と鋼鉄の意志を褒め称え、リムは近代国家シンガポールへの障害としてしか描いていないように思うが、この本は、リムの実像を様々な角度から再構築するとともに、シンガポール建国にまつわる「リー神話」に重大な疑問を投げかけている。権威ある「定説」への、挑戦ののろしといつてもよい。

研究の隙間を埋めたり、既存の研究を手際よく整理したりすることも必要で意味があるけれど、研究に生涯を捧げようとする者は、定説打破、それも権威ある一見不動の定説の打破をこそ本懐とすべきではなからうか。ただし、それが世に受け容れられるには、大胆かつ柔軟な発想(小泉首相ではないけれど)、不撓不屈の意志、粘り強い作業、そして何より緻密で隙のない考証が不可欠である。多岐にわたる所謂“一次資料”(時として未発掘の)の渉獵が求められる。当事者勢力が複数ある場合、いずれの勢力の主張についても周到に精査・検討したうえで、批判対象をも(少なくともある範囲においては)納得させ得る結論を下さなければならない。

私にはとても無理だから、若い諸学兄・諸学姉に、この、身に余る場を借りて、お願いする次第である。

* 南山大学